
魔法少女リリカルなのは～悪魔に魅入られた少女～

飛龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜悪魔に魅入られた少女〜

【Nコード】

N1607BA

【作者名】

飛龍

【あらすじ】

悪魔に魂を汚された少女は機動六課で……

それは小さな想いだった。

優しく髪を撫でて欲しい。

手を繋いで歩いて欲しい。

求めた想いは伝わらず、心に傷を刻んでいく。

魔法少女リリカルなのは、始まります。

6歳の誕生日に少女が見たのは赤い朱い紅い部屋だった。
臓物を撒き散らした屍が辺りに転がり、その屍の血で描かれた魔法陣。

屍の返り血で赤く染まった少女の母親は初めて少女に笑みを向ける。
それは壊れた者が見せる笑みであった。

目は狂気で濁り、口を歪ませた笑み。

少女へと近付いた母親は少女の真っ白な髪を手取る。

そして乱雑に握ると魔法陣の中心へと引きずっていく。

「母様いたいです、いたいです」

少女は目に涙を浮かべながら、母親を見上げる。

そして少女のもとに行き、不慣れな回復魔法を使いながら、少女を看る。

「ごめんね、もっと早く来れていれば」

フェイトは奥歯を噛み締め、自分の力不足を悔いる。

悪魔召喚の情報入手から、出撃許可申請、召喚に誘われた悪魔の送還、現場への到着。

どれを抜かしてもダメだが、もっと早く来たかった。

そうすれば、少女は傷を負うことなく助けられたかも知れないから。

金色の光に包まれて身体を癒やされている時、少女は夢を見た。

優しい両親、暖かい家、可愛い犬。

望んだ世界^{ゆめ}。

でもありえないと理解する世界。

少女は涙を零して呟いた。

「もつやだ……ワタシを殺して」

真っ白な髪 of 少女は黒い服に身を包みながら、夜の町で人を待っていた。

まだ8歳になったばかりの少女が一人ぼつんといるのは目を引くが、誰も声をかけない。

原因は少女が吸う物……タバコである。

口にくわえたタバコから紫煙が立ち上り、少女はぼんやりとそれを目で追う。

星空に消えていく紫煙。

少女はぼんやりと儂いなと思う。

「あゝルキまたタバコを！」

金色の髪を風に揺らしながら近付いた女性……フェイトは少女のくわえるタバコを取り上げる。

「あっ……」

少女、ルキフェール・ハラオウンは声を上げて、奪ったフェイトに目を向ける。そこには怒ってますと言わんばかりのフェイトがいた。

「うっ」

「唸ってもダメ」

「ぐっすん」

「な……泣いてもダメだからね」

寸劇のような会話をしながら、ルキフェールが持つ携帯灰皿でタバコを処理した後、二人はフェイトの車へと歩き出す。

黒塗りのスポーティーな車。

そこには猫耳の男の子がいた。

黒いふんわりとした毛と黒いしつとりと艶のある髪。

ルキフェールはそれを撫でるのが好きだった。

故に会つたら撫でる。

「主、恥ずかしいから」

「大丈夫、ワタシは恥ずかしくないです」
言い切つた主を見上げる猫耳少年。

その目は羞恥心によつて若干潤んでいた。

猫耳少年……名をルシファーという。

死に瀕した状態でルキフェールに拾われて、使い魔となつた。

元の姿は黒猫。

未だに未熟な部分が多いがルキフェールを主と仰ぎ、主の為に暗躍する猫であつた。

「ルキ、ルシファー、そろそろ車出すよ」

フェイトの声に我に返つたルキフェールは後部座席に2人で座り、シートベルトをしめる。

若干余裕があるように調節した後、窓を開け外を眺める。

走り出したことによる風でルキフェールの髪は流れる。

顔にかかりかけた髪をルキフェールは手で掬い、後ろに流す。

映画のワンシーンのようなルキフェールにルシファーは、感嘆の息を吐く。

「どうしたの？」

それに気付いたルキフェールが訊ねるとルシファーは頬を赤く染めながら答える。

「主、とっても綺麗です」

そう言われて、ルキフェールの頬も紅潮していき、何とも言えない空間が出来上がる。

一人取り残されたフェイトはどう声をかけたらいいのか分からず、

暫く1人で悶々とする羽目になる。

トンネルを抜けると海の匂いが鼻を刺激した。

きらきらとした太陽の光を浴びて、海を煌めかせる。

「うわあ」

ルシファーが海に声をあげる。

フェイトとルキフェールはそんな様子のルシファーに微笑みを浮かべる。

「美味しそう」

……。
……。

「あゝ魚？」

「うん、飛び魚だよ。美味しそうだよ」ルキフェールはなんだか疲れたように背もたれに身体を預ける。

その様子に首を傾げるルシファー。

「そろそろ機動六課に着くよ」

フェイトの声に2人は気を引き締めた。これから向かう新しい職場。

機動六課。

その名は未だに人々に噂されることはないが、その部隊を構成する人員は異常であった。

管理局においてその名を知らないとされるエースオブエース。

【高町なのは】。

桜色の魔力砲撃を味わった者は桜色の何かを見る度に砲撃に蹂躪された時を思い出し、ガタガタと身を震わせると云う。

戦闘時もしくは訓練時以外では人懐っこい笑顔とスタイルの良さで度々人を魅力している。

それから、敏腕執務官として知られる【フェイト・テストロッサ・ハラオウン】。

有り得ない速度で敵を翻弄する戦い方に見た者は魅了されるという。綺麗な金髪と綺麗な顔、同性から嫉妬を超え敗北感を味わわせるスタイル。

更には天然気味な様子に管理局、果ては犯罪集団にまでファンクラブを持つという規格外。

そして、夜天の書の最後の主にして、蒼天の書の主【八神はやて】
守護騎士たるヴォルケンリッターをも連れて機動六課を設立した張
本人。

狸のような狡猾さと謀殺術でエリート街道を走り、将来的には管理
局の上層部まで上り詰めると言われてる。

デバイスを通した翻訳機能を用いても妙な言葉使いになるとい
うバグ持ちでもある。

上記二人のような突出した人を魅了する外見ではないが時折見せる
儂げな姿に魅せられる人は少なくない。

そのような人達が納める機動六課は今動き出そうとしていた。

機動六課の部隊長室への道を歩くのは三人。

機動六課制服に袖を通したフェイトとルキフェール。

燕尾服に袖を通したルシファー。

「主、なぜこのような服を？」

ルシファーは困惑気味に声をあげる。

その様子にルキフェールは鈴の音のような声で笑う。

「似合ってるよ、ルシファー」

そう言ってフェイトはルシファーの頭を撫でる。

「フェイト殿そういう問題では……」

「ルシファー、気にしないの。かわいいよ」

ルキフェールはそう言って、また笑う。

そんな主を若干涙を浮かべながら、睨むと、フェイトにまた頭を撫
でられていた。

頬を赤く染めてるルキフェールにフェイトは微笑みを浮かべる。

ノックの音に部隊長室で書類を処理していた八神はやては顔をあげて入室を許可する。

「どうぞ」

「失礼します」

「失礼するです」

「失礼させて頂きます」

三者三様の答えにはやては苦笑する。

入ってきたのは、フェイト達御一行。

「お疲れ様や、三人とも」

「ルキフェール囑託魔導師、機動六課着任確認や」

ルキフェールが提出した書類に判子を押して、ファイルに納める。

「そろそろお昼やし食堂行こか？」

はやてがそう言いながら、席を立つとルキフェールは目をきらきらと輝かせ始めた。

「卵料理あるですか？」

「勿論や、オムレツとか色々あるでえ」

「エリオやキャロも喜ぶです」そう言っつづきつきと退出しよつとするルキフェールを腕にしがみついてルシファーが止める。

「主、食堂の場所分かるのですか？」

その言葉にルキフェールは顔を真っ赤にして俯きながら、フェイト

の服の裾をつかむ。

機動六課の制服を着込んだ者達が並ぶ中、後ろの方でこっそりと逃げようとした少女を捕まえている少年がいた。

赤い髪の少年、エリオ・モンドイアル。

捕まえられているのはルキフェール。

並び待つ中でルキフェールは急に煙草を吸いたくなったのだ。

バレないようにこっそり抜け出して、海を眺めながら吸おうと思っていたのだが、兄貴分のエリオに見つかり捕まったのであった。

「離すです」

「ダメだよ、もうすぐ始まるんだから」

腕をがっしりと掴まれ身動きが出来ない。

今頃布団でまるくなっている使い魔に若干の恨めしさを感じる。

そっこうしている内にはやてが前に立ち話し始めた。

はやての部隊理念、部隊構成の説明が終わり、フォワード陣で一カ所に集まる事になっていた。

そこにルキフェールの姿はない。

話終了と共に猫のようなしなやかに動き、エリオの阻もうとした手をすり抜け、海に面したベンチに逃げている。

ライターに火を灯し、口にくわえた煙草に火を付ける。

吸い込んだ煙が喉を通り抜けて肺へと入っていく。

「はあ〜」

盛大に溜め息と共に煙を吐き出す。

新しい職場に対する希望、隊長陣に対する羨望。それらはルキフェールにはいささか眩しすぎた。

ルキフェールの中には悪魔がいる。

一つの街を巻き込んだ665人の血と臓腑で魔法陣を描き、6月6日に6才の誕生日を迎えた自分を悪魔の最後の贄として行われた儀式は、次元震を巻き起こしながら進められた。召還に応じたのは特級の悪魔であった。

現界するだけで次元世界を滅ぼしかねないそんな存在であったと聞いた。

その情報を得た管理局が動いた時には儀式は始まっていた。自分を魔法陣の中心に張り付け、行われた儀式は私の身体を門として内臓を門とする儀式であった。門を食い破り出ようとした悪魔であったが、管理局の動きに儀式は中断。自分の中に入り込んでいた悪魔は己の物とでも言わんばかりに、印を残していった。

その印は呪いであった。

身を苛み、心を汚し、命を削る。

そんな自分は研究者からしたら、素晴らしい研究対象だったのだらう。

管理局は積極的に実験への参加を求めた。

それをくい止めたのがフェイトさんだった。

保護責任者になり、自分を守ろうとしている。
生きている間は……。

「はあ」

ルキフェールはまた盛大に溜め息をつき、ままならない現実に頭を痛める。

ルシファアの様子でも見に行くかな。

ルキフェールは気分を変えようと自室に向かった。

今日はバルディッシュとお留守番してるし、会話には困らないだろうと。

すぐにフェイトがバルディッシュを回収して出掛けることも知らずに……。

「いふあい、いふあい」

自室に戻ったルキフェールは夢見が悪かったのか涙を浮かべていたルシファーを心配していると保護者に頬を引っ張られていた。

「フォワード陣で集まって訓練あるって言ったよね、ルキ」

それは笑っていた。

暗い笑みにルキフェールは、ガタガタと身体が震える。

煙草をいくら吸おうが君臨しなかった鬼がいた。

実は儀式に乱入した彼女は悪魔に汚染されて乗り代わられたのではと思うぐらいであった。

「全くエリオから逃げられましたと聞いてびっくりしたんだよ」

頬を膨らましてむくれたように言うフェイトに先ほどまでの恐ろしさはない。

逆に可愛らしい雰囲気であった。

「ううう……ごめんなさいです」赤くなっただ頬をさすり、涙を浮かべながらルキフェールは謝罪を口にする。

「何してたの？」

「煙草吸ってたのです」

言った瞬間に頭に鈍痛が走った。

頭を抱えてうずくまるルキフェール。

それを心配そうに眺めるルシファー。

なかなか微妙な状況がそこにあった。

訓練施設……海上に作られたそれはあらゆる戦場に姿を変える。

そこではフォワードの四名が今後敵対するであろうガジェットもどきと戦闘訓練をしていた。

カプセル形の機械兵器。

その一番の特徴はAMF。

魔力結合を阻害して魔法の行使を邪魔するという魔導師には有効過ぎる兵器であった。そしてAMFを抜いてもガジェット本体の装甲が堅いという、一体倒すのにも見習い魔導師では苦勞するレベルであった。

今回フォワードが戦うガジェットもどきは装甲の堅さ、AMFの強度を下げ、対AMF戦の動きを経験させることに意味があった。

訓練校や普通の現場では相対することすらない相手。

そして、機動六課が必ず敵対する相手。

故に少しでも早くAMF下での戦闘に慣れて貰わなくてはいけない。

危なげながらガジェットを倒した四人は、なのにより訓練施設のある場所に集められる。

そこにはルキフェールとルシファーがいた。

「主、大丈夫ですか？」

「大丈夫。私はフルバックだよ」使い魔の心配を浮かべる顔にルキフェールは笑みを浮かべて答える。

「ルクス、セットアップ」

ルキフェールの腕輪としてあったストレージデバイス、ルクスはルキフェールの声に反応して、展開された。

それは翼であった。

一本のスラスタから放たれる青白い魔力がまるで天使の翼のように象る。

それはまるで悪魔の翼のように冷たい印象を与えた。

「ルキフェール、綺麗……」

「可愛いよルキフェール」

フォワード陣の内二人ライトニング分隊の赤い髪の少年エリオと桃色の髪の少女キャロの言葉にルキフェールは頬を赤く染めて、空に舞い上がる。

この二人は訳ありでルキフェールと同じくフェイトが保護責任者になっていた。

ルシファーはスターズ分隊の青い髪の少女スバルと橙色の髪の少女ティアナの引きつった顔を見て哀しげに空を見上げる。

そこには片翼で空を舞う少女がいた。

胸の前で手を合わせ、目を閉じる姿はどこか儚げで、今にも碎け散りそうであった。

ルシファーは小さく呟く。

「
」

それは誰にも届かず

、風に消えていった。

それは故人に誓いであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1607ba/>

魔法少女リリカルなのは～悪魔に魅入られた少女～

2012年1月6日06時48分発行